

文章表現教育へのリーディング・リテラシーの導入

～医学部初年次教育における改革案～

三原 祥子（東京女子医科大学医学部）

松本 茂（立教大学経営学部）

1 はじめに

本発表は、医学部の初年次生約 100 名を対象にした必修科目（1 コマ 85 分 9 回展開）である「表現技術」という、2007 年度時点では構造的に書く技能を習得することを重点的に取り上げている授業のシラバス改善の必要性と、リーディング・リテラシー【注 1】の要素の導入によりどのような改善を目指すのかについて説明する。

2 これまでの指導法にリーディング・リテラシーを導入する必要性

これまでの指導法は、書く目的、読み手の存在などを尊重しつつも、読み手が一読で理解しうる効果的な文章を効率的に書くことを可能にする基礎的な書く技能がまずは医学生に期待されているとし、主な学習目標は、レポートの型、構造（パラグラフ、センテンス、フレーズ）など、標準モデルに準拠したライティングが効率的にできるようになることであつた。書くことに専念できるようにし技能の習得を確実にすべく、執筆以前の文献調査等の負担、論証に必要な知識習得の負担を軽減させた。具体的には、各自がよく知っている、つまり調査の成果である主題での話題の抽出、アウトラインの設計、執筆を行った。

上記のような基礎的な技能の向上という目的はおおむね達成されたが、以下のような学生には新たな対応が必要であることが認識された：①ケラーの ARCS 動機づけモデルにおける「自信：やればできそうだな」という動機づけはなされたものの、医療系ではなく自分がよく知っているテーマを扱ったために、専門教育との関連性に疑問を持った学生、②直観で思いついた「考え」の域から脱することができず、考察・内省が深まらない学生、③型に当てはめて書き、課題をこなすことに止まった学生。

そこで、医学部における初年次の文章表現指導を、医学部での専門教育における学習に今まで以上に貢献できるように、シラバス等を改訂し、2008 年 4 月より実施する。本発表では、シラバスを改定する視座を提示し、これまでの指導との違いを明確に提示する。

3 医学部教育における「書く活動」

医学部生が専門教育において書くという活動を行う場合、初年次の段階で多い課題は、絞り込まれた主題を共有し、その主題に関する概説書、専門書、HP の情報等を読み議論したうえで、学び取ったことを自分の言葉でまとめるテュートリアルレポート、実験のレポート、体験学習のレポートである。年次が進むと、テュートリアルに、ペーパーペイシャントおよびその検査データなどを読み、臨床的推論を要求される課題が加わる。このように、初年次でも上級学年でも、多量の知識を効率よく正確に学び取るとること、および、問題発見・問題解決型思考を伸張することを目指す課題が多い。しかし、あいまいな理解のまま、咀嚼せずに書いているケース、文献・データおよび自身が書いた内容を批判的に読めていないケース、レポートの論点があはつきりしておらず、知識としても身につ

いていない「言語的理解不全」(ブルデュー、他、1999)の状態になっているケースが少なくない、という現状が存在する。つまり、「活用」に問題が存在している。

4 改革の方針と期待される学習成果

このような状況を踏まえ、新年度より以下のような方針で、シラバスを改革する。

初年次教育において、コミュニケーションのための技能を獲得することは、あくまで成果 (Outcomes) であり、その学習・指導プロセスにおいては、以下のようなコミュニケーションの定義をすることを提案する。

コミュニケーション (定義)

①二人以上の人間が言語・準言語・非言語を媒介として直接的または間接的に関わる過程および状況のこと。②個人が社会との結びつきを創造し、保持する行為。③見えざる自己との対話行為—自己認識のプロセス。(松本、印刷中)

この定義に則ったコミュニケーションの概念にもとづいて、コミュニケーション関連の活動を捉え直すことにより、初年次教育が基礎的な準備教育という域を脱し、「コア教育」へと発展する可能性を探る。以下が、改革の方針である。

(1) リーディング・リテラシーの要素を活動に取り入れて、批判的に読む活動を積極的に取り入れ、読んだ内容をもとに書く体験、書くことが前提で読む体験を増やす。

(2) 教授デザインに構成主義的要素を取り入れて活動を見直し、ピア・レスポンスの要素を今まで以上に取り入れたり、専門教科を担当する教員、医師、看護師、上級生などにも読んでコメントをもらうといった活動を取り入れたりすることで、学びの共同体 (learning community) の一員であることを感じられるようにする。

さらに改革の方針に則って作成したシラバスをもとに指導した際の「期待される学習成果 (Learning Outcomes)」を以下のように設定した。

(1) 関連する内容の読み物を批判的、かつ能動的に読める。

(2) (1) で読んだ内容を適切に活用して、論理的に文章が書ける。

(3) 目的、読み手の期待などを意識しつつ、自分の原稿を批判的に読み直しつつ書ける。

【注1】「リーディング・リテラシー」の定義は、2003PISA 調査における「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」というものである。

【参考文献】

ブルデュー (1999) 『教師と学生のコミュニケーション』ブルデュー, P. 他 (安田尚・訳) 『教師と学生のコミュニケーション』(p.13) 藤原書店

三原祥子 (2005) 「特集 学生のコミュニケーション力をどう育てるか【書く力を育てる】ピア・レスポンスを取り入れた指導」『看護展望 Vol.30 No.12』(pp.39-42) メヂカルフレンド社

三原祥子・君島浩 (2007) 「教育方略および言語学の観点からの医療系大学表現技術系科目の改善案」『大学教育学会第29回大会発表要旨集録』(pp.146-147)

松本茂 (印刷中) 「初年次教育プログラムにおけるディベート指導の在り方」『コア・FYE 教育ジャーナル』第1号 (玉川大学コア・FYE 教育センター)